

生体実験を拒否した生理学者 横山正松

末永 恵子

福島県立医科大学医学部人間科学講座

受付：平成19年12月20日／受理：平成20年4月24日

要旨：本稿は、日中戦争中、上官から出された非人道的な人体実験の命令を拒否した生理学者で軍医の横山正松（よこやま しょうまつ 1913～1992年）の生涯を紹介したものである。

七三一部隊に限らず、日本軍が侵略した土地の人々に対する医学犯罪には、多くの軍医が手を染めていた。しかも、非人道的な生体実験・生体解剖は、広く行われていた。

しかし、一方で稀ではあったが、生体実験の命令を拒否した研究者がいたことも事実である。その希有の存在に光を当て、彼がなぜ拒否することができたのかについて追究することは、医の倫理について考える際の参考となるであろう。

横山正松は、学生時代に恩師の川村麟也（かわむら りんや）教授から、「今軍部から特殊実験を要請されている。これをやれば講座研究費の十数倍が入るが、人道に反すると考えて断った。君たちも将来同じ問題にぶつかるかもしれぬ。おれの言ったことを忘れるなよ」と言われた。

横山は、1944年、甲（こう）一八五五部隊に召集されるが、上官から生体実験を命じられた。しかし、彼は川村の言葉を思い出し命令を断った。その結果、危険な最前線に派遣されることとなる。

横山正松がなぜ非人道的な実験を拒否し得たのかを、横山の生い立ちや川村麟也との関係から考察する。本稿は、戦中・戦後に自己の良心を貫いた医学研究者の生き方の記録である。

キーワード：日中戦争、横山正松、生体実験、戦争犯罪、川村麟也

はじめに

日中戦争期、日本軍においては、七三一部隊に代表される細菌戦を目的とした生体実験や、外科手術の経験の乏しい軍医の再教育を意図した生体解剖が相当件数行われていた¹⁾。そのような非人道的な行為は、日本軍が侵略していった地域で組織的に広く行われ、しかも当時の医学関係者の間では、公然の秘密であった²⁾。

その中で、逆に生体実験の命令を拒否した例は、現在ほとんど知られていない。ひとたび軍医となった者が、上官からの命令による生体実験を敢えて拒否することは、想像を絶する覚悟が必要であったと思われる。

本稿は、その稀有な存在である、もと軍医で生理学者の横山正松を紹介し、彼がなぜ命令を拒否できたのか、その理由を彼自身の著述や家族の文

章をもとに経歴に注目しながら考察したい。

1. 横山正松について

生い立ち

横山正松は、1913年（大正2）11月10日に父常治郎・母ヤスの三男として新潟県北魚沼郡小千谷町に生まれた。彼の家は、米作と養蚕を営む貧しい小作農家であった。当時地主への小作料は、収穫料の5割を超す現物納であったとされ、多額の借金を背負っている農家も多かった³⁾。新潟県下では、小作争議も頻発していた。

しかし、正松少年は、進学に理解のあった母の支援を受け、地元の小千谷小学校、小千谷中学を卒業する。中学三年生の時、彼は急性骨髄炎で入院し、数回の骨の手術を受けた。この医療費は、横山家の家計に大きな負担を強いることにもなった。その時の経験から、貧しい人のために医者にな

なろうと決心したという⁴⁾。

闘病のため一年間留年したものの、その遅れを取り戻そうと猛勉強し、四年生在校時(修業年限五年)に旧制官立新潟高等学校理科乙類に合格した。だが、合格はしたものの学費を心配して入学させるのを躊躇していた父に、元小千谷町長の島田博が「服や帽子、靴や本は、俺の子のお下がり全部くれてやるし、毎月援助もしてやる」と支援を申し出、入学が可能になったという⁵⁾。そして、苦学しながら1934年(昭和9)新潟高校を卒業し、翌年新潟医科大学に進学した。

医学研究者へ

この新潟医大で、「良き師、良き友にめぐまれた」と言う横山の回想「若い日の私」⁶⁾を要約し、以下、大学時代を概観したい。

横山が影響を受けたのが、恙虫病研究の第一人者であった病理学教授の川村麟也である。当時恙虫病の解明を目指し、各地の研究者が激しい先陣争いをしていた。その途上で多くの研究室関係者の犠牲が出ていて、新潟医大でも四名が研究室感染で死亡していたのだった。横山は、一、二年生の時に、恙虫病の免疫療法に取り組む川村の研究室に出入りしていた。

そんなある日、川村教授は、「今軍部から特殊実験を要請されている。これをやれば講座研究費の十数倍の金が入るが、人道に反すると考えて断った。君たちも将来同じ問題にぶつかるかもしれない。おれの言ったことを忘れるなよ」と言った。

この「特殊実験」が何であったか不明である。しかし、恙虫病に関するものであった可能性は否定できない。当時この病は、死亡率50パーセントと言われ、恐れられていた。

ともあれ、その実験要請は、川村によって非人道的であると判断され、拒否された。莫大な研究費というあめを見せられても川村の意志は、動じなかった。そして、人道に反する実験は決して行ってはならないという実践を伴った教訓は、横山の脳裏に刻まれたのであった。医学研究者を志す初期段階におけるこのような体験は、後に意味をもつようになる。

川村の研究者および教育者としての存在感は、新潟医大においてひととき大きかった。川村は、1924年(大正13)に「類脂肪の研究」で帝国学士院賞を受賞し、また『病理総論』(草間滋との共著)・『恙虫病之研究』などの著書を出版していた。1936年(昭和11)学長選挙に出馬した川村は、最有力候補と取り沙汰されていたにもかかわらず、附属病院長の整形外科教授・本島一郎に敗れる。この選挙結果は、卒業生で作られた学生会の会員の多くにかなりの衝撃を与えたという。

翌年川村は、親友の慶応義塾大学教授・草間滋の死去にともない、その後任として慶大病理学教授及び北里研究所部長として新潟を去ることとなる。川村を慕った学生たちは、転出後も病理学の講師として川村が講義を担当することを希望し、1924年(昭和12)2月下旬本島学長に嘆願運動を起こしたほどであった⁷⁾。したがって、川村転出のため、横山は、師事することはできなかった。

しかし、横山は魅力的な別の研究分野に出会う。それは、生理学であった。当時生理学教室は、一風変わった雰囲気があったと想像される。教授横田武三は、「在任中一本も論文を著さなかった希代の師」⁸⁾と言われるが、研究上の指導・示唆・忠言はよくその核心をついていたという。また、学生の教育には熱意を持ち、生理学のほかには早朝・放課後に語学・数学・物理学の化学授業を行った。横田は特に語学にすぐれ、独・仏・英・ギリシア・ラテン・中国語にも造詣が深かった。「一般の社会事象の判断や批判についても、つねに一家言をなし、寸鉄よく人をつく独自の風格を具えて」いたと評されている⁹⁾。

この横田門下の福原武は、新潟医大を1928年(昭和3)に卒業、1930年(昭和5)に母校の生理学教室の講師となった。彼は、腹窓法による消化管運動の研究で成果をあげ、1933年(昭和8)には助教授となる。

腹窓法と活動写真を併用した研究手法で、内臓運動の理解を深め、小腸運動、胃、大腸、尿管、卵管、子宮にまで対象を広げている。これらの研究は「新潟の腹窓法」として生理学界で有名になった。また、福原は、心臓の興奮伝導の研究も

手がけ、昭和1935年（昭和10）頃から、His束切断実験などの方法により心臓刺激伝導系の研究に携わるようになっていた^{10）}。

演劇と文学

横山は、新潟医大の演劇研究会に属し、またゲーテを愛読する文学青年でもあった。福原は演劇研究会の会長であり、チェーホフの作品を愛好していた。彼は、学生としばしば演劇論、哲学論をかかわしたという。

当時の生理学研究の最先端を走りかつ、文学にも造詣の深かった福原に対するあこがれもあり、横山は生理学を専攻するようになったと考えられる。

また、医大の同級生で、演劇研究会のメンバーの北村四郎は、大学の枠を越えた市民劇団「劇団新潟」を作って、新劇を公演するようになり、横山は北村の劇団運営を手伝った。

のちにこの活動がもとで北村は、治安維持法違反容疑で逮捕されることとなる。この劇団についての取調書には、「昭和11年頃、北村四郎（新潟医大より参加し現在責任者）、角文雄等は相謀り、新潟医大内部に『劇団新潟』の有力なる支持組織を確立し、演劇理論の研究を通じて学生を共産主義方面に結集する目的を以て『新潟医大演劇研究会』を組織し、爾来毎月一回乃至二回学内池原記念館及教室等に於て研究会を開催し、イブセン、ハウプトマン、ヴィデキント、チェホフ、久板栄二郎等の作品並に著書をテキストとして共産主義観点より研究し、会員相互の啓蒙、意識の高揚を図りつつありたり^{11）}と記されている。

北村は、もとより共産党員ではなく、共産主義的思想の持ち主ですらなかったが、逮捕され、9ヶ月以上にもわたって新潟警察署の留置所に拘留された^{12）}。

北京大学での生活

一方、北村逮捕の前年の1939年（昭和14）3月、横山は新潟医科大学を卒業するとすぐに北京大学医学院の生理学教室助手（教授は福原武）に就任した。この北京大学は、1937年（昭和12）7月の

盧溝橋事件の勃発に伴って北平（北京）が陥落した後、日本軍によって樹立された北京臨時政府の管理下に入っていた。

それまで在職中の中国人教官と在学生の多くが大学から去り、抗日ゲリラ戦に身を投じたり、新たに教育や学習環境を求めて他郷に赴いたりした。そして北京大学自体は、後に国民党政府教育部の命令により、清華大学と南開大学と共に南下して長沙臨時大学として開校した。しかし、南京・武漢が陥落して長沙にも戦火が及んだので、さらに奥地の昆明に疎開し、そこに国立西南聯合大学を開校した^{13）}。

一方、北京大学の学舎には日本から研究者が送りこまれた。医学院の首席教授として他の教授の監督にあたったのは、生理学者で台北帝国大学医学部長を勤めた永井潜であった。

福原武は、既にその日本人教官のひとりとして1938年（昭和13）11月、北京大学医学院の教授に就任していた。

福原のもとに助手として赴いた横山にとって、北京は青春の新天地であった。次のように回想している。

北京はほんとうに美しい街だった。景山に登り、紫禁城や街全体を初めて見た時、私の脳裏にベートーベンの曲が鳴り響くような感じを覚えた。日中戦争の最中であつたが、中国人は我々に寛大であり親切だった。福原教授と私は物資不足であつたが、心臓と小腸の実験を猛烈にやった。心臓房室基部自動中枢、小腸運動、心臓神経の研究で成果をあげた。福原教授の指導で、クロード・ベルナルの「実験医学序説」を数年にわたって輪読し、実験方法から哲学的考察にいたるまで徹底的に議論をした。中国人男女学生との交流もあり、私の生涯の中で最良の時、正に北京好日であつた^{14）}。

この北京での成果は、新潟医大に提出された博士論文 *Jahreszeitliche Schwankungen der Sympathikuswirkung auf das Krötenherz. I. Mitteilung* に結実した。

中国人との交流

横山の目に、「寛大」で「親切」であると映った周囲の中国人は、被占領地の民族の処世術としてそうならざるを得ないという側面もあったであろう。

横山にとって「北京好日」であった時期も、北京住民にとっては、日本による占領の日々であった。占領は日本敗戦まで約8年間続いた。傀儡政府、警察局や憲兵隊の実態、監獄での待遇、皇民化教育の現場、劣悪な食糧や文化生活など、北京に当時生活していた中国人たちが、占領の日々を詳細に綴った回想録『北京の日の丸一体験者が綴る占領下の日々』¹⁵⁾がある。それを読むと、征服者である日本人に対する怖れと憎しみ、そして抑圧されたナショナリズムがマグマのように心の底に燃えたぎっていたことを知ることが出来る。

北京大学では、かつて教授・学生が、五四運動に多数参加するなど、反帝国主義活動の伝統があった。したがって、排日的・共産主義的活動を実践して、大学を離れた者が多数存在した。しかし、一方でさまざまな事情で大学や北京を離れることができなかつた者もいた。残った中国人も、日本人が実権をもった大学の体制について、もろ手を挙げて歓迎していたとは考えにくい。苦渋の選択を余儀なくされた者、複雑な感情を秘めた者の存在については、想像に難くない。

しかし、上記のような客観的な北京大学の環境とは別の次元において、横山個人の周辺の限られた範囲での中国人との交流が、後年まで印象を残す親しみや敬愛のこもったものであったことも確かであろう。横山は、女子医学生の大塚から中国語を教わり、横山は王に日本語を教えたという。また、抗日運動地下活動のために大学を去る学生たちの中には、横山に離別の挨拶をしていた者が何人かいたという¹⁶⁾。

応召と生体実験拒否

突然、大学での生活に転機が訪れた。1944年(昭和19)2月10日召集令状が来て応召を余儀なくさせられたのである。同月1日に副教授に昇任したばかりであった。彼は、軍医として、北京の

天壇に本部があった北支那防疫給水部に入隊した。出征前に、北京大学の宿舎に残る身重の妻へ「部隊は給水班だからたぶん戦線には余りゆかぬ」と言っていた¹⁷⁾。

さて、生体実験の命令が下った時のことを、横山は次のように記している。

入隊式の折、部隊長から人体実験を命ぜられた。「君が大学でやっていた腹窓法(動物の腹にセルロイド膜をはり、小腸運動を観察)を人体に適用し、歩兵銃で腹部貫通をやり、銃弾が腸を貫通しても、腸内容がもれぬようにするには、いかなる薬を利用すればよいか、すぐ実験せよ。野戦で敵弾を腹に受け、急性腹膜炎を起こして死ぬ兵隊が非常に多い。これを防ぐためだ」

私は即座に川村先生のこぼを思い出し、「人命を損なう、そのような実験はやりません」と答えた。部隊長は激怒し部屋を出て行った。当時上官の命令は天皇の命令であり、絶対服従が軍のおきてであった。私は軍法会議に回されるかと思ったが、そのことはなく間もなく河南省、さらに湖北省の最前線に派遣された¹⁸⁾。

さて、横山が入隊した北支那防疫給水部(「北京甲一八五五部隊」とは、どのような部署だったのであろうか。陸軍軍医大佐で部隊長の西村英二による『北支那防疫給水部 業務詳報(業詳第11号)』によると、北支那防疫給水部は、北支那方面軍司令部の直轄下にあり、本部を北京に置き、他に支部・出張所を12カ所配置し、これによって華北地域全般にわたる防疫と給水業務を担当するとしている。この他、防疫給水に関する教育や調査研究、各種予防剤、治療剤の製造補給や特殊伝染病患者や、一般伝染病患者の収容・治療などを行うと述べている¹⁹⁾。

北京の本部には、第一課から第三課に分かれた研究専門部門が置かれていた。先述の『業務詳報』では、第一課の業務分担は、「細菌」「結核」「培地」「菌株」「血清」「BCG」「病理解剖」など、第二課は、「ワクチン」「血清」「検索」「痘病」「培地」な

ど、第三課は、「研究室」「特別研究室」「調査室」「生産室」となっている。

しかし、元部隊員の証言によれば、部隊内では「ペストのみ」の生産が行われた²⁰。それは、1943年（昭和18）頃から本格化していたという。こののみや小動物を繁殖させるための大規模設備があり、また、部隊撤退後の遺留品には、強毒ペスト菌株の入った試験管があった²¹。これらは、細菌兵器製造を前提としていたと考えられる。

そして、生体実験のために中国人捕虜を連行していたことについても、部隊員の証言がある。

1944年夏過ぎ、H氏は豊台の捕虜収容所から三課に捕虜を連行するときの警備を命じられた。連行は三日に渡って、それぞれ6名、5名、6名と中国人捕虜が連行された。捕虜は、足枷はしていなかったが手錠をかけられていた。第三課に到着すると、監獄にしつらえた部屋に入れられた。最初の日に六人を連れてきたが、その日だったか翌日だったか、本部から二人の軍医がやってきた。一人ではやられてしまう恐れがあるので、二人で入った。白衣を来た軍医は、捕虜に注射を打った。注射がどのような種類のものだったかは不明であるが、注射してから一日もしないうちに、彼らは弱っていった²²。

衛生兵であった伊藤影明氏も、1944年（昭和19）11月と1945年（昭和20）2月、第三課の構内に嚴重に幌をかぶせたトラックが入り、中国人捕虜を連行した場面を目撃している。捕虜が連れ込まれた三階の奥には、許可無く立ち入りが禁止された。そのうち、ある軍医に呼ばれ「ペスト菌を注射してあるのだが、ちょっとお前見てこい」と言われ留置所ののぞき穴のような所から中をのぞいた、その時、偶然にその捕虜と眼があった。その時のうらめしそうな様子、お前もか、というような様子、そのことは、復員してきて何年たっても夢に見るといふ²³。

以上のように、北支那防疫給水部の本部については、その全容はいまだ不明ながらも、細菌戦部隊として、細菌戦のための生体実験を行っていたことは、ほぼ確実とみてよい²⁴。そして、中国人捕虜を対象にした生体実験の内容は、細菌戦に向

けたものであるとのみ考えられていた。しかし、横山に課せられた腹部貫通実験のような例から、捕虜は、細菌実験だけでなく他の分野の実験対象にも想定されたと見てよい。この場合、西村が横山に期待したのは、腹部に銃弾を受けても内容物が漏れ出ないようにする薬の開発であった。まさに、傷兵を致命傷から救う実験的軍陣医学である。

横山は、西村隊長の実験要請を、即座に拒否した。川村麟也の言葉を思い出したからであると言う。

横山の命令拒否は、新潟医大の同級生で、当時関東軍防疫給水部に所属していた軍医大橋義臣の耳にも達した。大橋は、横山の妻を訪ねて「横山は上官に、『支那人の捕虜がたくさん居る。お前は犬の腹に窓を作って腸の運動の研究をしているそうだから、捕虜の腹に窓を作って実験せよ』と命令されたが、それを拒否したそうだ」と連絡したという²⁵。

横山は、軍法会議にかけられることを覚悟したというが、それはなかった。しかし、研究部門を外され、北支那防疫給水部の鄭州支部へ派遣された。

日本の敗戦により、1945年（昭和20）8月19日に召集解除され、その後、家族の待つ北京へ約千キロの道のりをほとんど徒歩で向かった。そして、翌年5月12日に日本にたどり着いたのであった。

帰国後は、新潟医科大学薬理学教室助手（助教は福原武）を経て、1948年（昭和23）米子医学専門学校助教授（教授は福原武）に就任するが、間もなく結核のために入院する。翌1949年（昭和24）4月に退院して、福島県立女子医学専門学校生理学教室教授に就任した。翌年女子医専は昇格して福島県立医科大学となり、1951年（昭和26）にその生理学教室の教授となった。しかし、再び結核を発症し、翌年まで入院を余儀なくさせられるなど、病との苦闘は続いた。

回復すると、1961年（昭和36）から1963年（昭和38）までドイツのフランクフルトのアム・マイン大学とアメリカのオハイオ州立大学に出張し、積極的に研究を行った。その在外研究をきつ

かけに、アウエルバッハ神経叢から活動電位を記録するという発想が生まれ、1966年(昭和41)独自に開発した細胞外電極を使って、それに成功することとなる。この研究について横山は次のように述べている。

アウエルバッハ神経叢の電気生理学的研究は、従来なされていなかった。私はこの神経叢の顕微鏡下の美しさに驚き、ぜひとも、ここの電気的現象を記録しようと考えた。悪戦苦闘の結果、家兎小腸の律動的分節運動(rhythmic segmentation)の発生時に小腸表面から漿膜、縦走筋を貫いて、微小金属電極(白金イリジウム)の先端をアウエルバッハ神経叢にあて、その活動電位を記録し、その成績をPflüger Archivに発表した²⁶⁾。

横山の研究は、世界の生理学者を刺激し、その後、神経叢の電気生理学の隆盛の礎を築くこととなった。生理学者の辻繁は、横山を腸管電気生理学の創始者と呼んでいる²⁷⁾。

大学の停年退官後も、横山の生理学への関心は旺盛で、1979年(昭和54)よりアメリカのロヨラ大学とパリ大学の招聘を受け、在外研究を行っている。

また、1983年(昭和58)には、「核戦争を防止する福島県医師の会」を立ちあげ、その世話人代表となった。この会は、「核戦争を未然に防止するという人類の悲願達成のために、医師の立場から積極的に世論を喚起し、恒久平和に貢献することを目的とする」²⁸⁾ことが規約に謳われている。

翌年の1984年(昭和59)には、福島市内の諸団体が連帯する「反核福島市民の会」が結成されるが、その代表世話人に就任している。

70歳を過ぎて核戦争防止のために物理学の勉強を始めた。反核を訴える講演会では、黒板に核分裂と核融合の数式を書き、物理学の偉大な発見が結局は原爆、水爆の開発につながった人の世の矛盾、愚かさを嘆いた。「核にかかったら、医師が一つの命を救うために行っている行為は靴磨きみたいなものです。一つ間違うとこのすばらしい

地球が無になってしまうのですから。だから核をこの世から無くさなければならぬ」と訴えたという²⁹⁾。

1992年(平成4)、79歳で死去するまで、平和反核運動と生理学研究への熱意は衰えることがなかった。

2. 生体実験命令拒否を可能にしたもの

前章で、横山の生涯を概観した。横山はなぜ生体実験を拒否することができたのだろうか。ここでは、彼の人格形成の中で実験拒否に影響を及ぼしていると思われる点を抽出してみたいと思う。

第一に、彼は、多感な少年期に、収穫の半分を地主の所にべこべこしながら持って行く父の姿に、制度の矛盾を感じたという³⁰⁾。そのような農村での貧しさの中で苦学し、さらに重ねて病気と闘うという苦難を味わう。それが、「貧しい人のための医者になろう」という強い使命感の源泉となっている。社会の矛盾に疑問をもちながらその是正を希求する気持ちは、演劇や文学の愛好ともどこかで関連していたと思える。

第二点に、恩師川村麟也の存在である。多額の研究費という甘い蜜で誘われても、人道に反する実験を拒否した川村自身の聲に接したことが、直接的には彼に大きな影響をおよぼしたと考えざるを得ない。非人道的実験はいかなる条件下でも行わないことが、研究者の義務であると、川村は教えたのである。

対照的に、京都帝国大学医学部生理学教室教授正路倫之助は、七三一部隊部隊長石井四郎の要請もあり、当時講師であった吉村寿人を満州に派遣した。敗戦後帰国した吉村に対して正路は、「自分は、石井部隊で何をやっているかをうすうす知りながら、厭がる君を無理矢理満州へ送り、しかも今日のような事態を迎えて、君や君の御家族の生命に危険が及ぶ所迄追いつめた事は自分の大へんな誤りであった」と謝罪したという³¹⁾。正路は七三一部隊内における非人道的実験内容を知りつつ弟子を送り出していたことがわかる。

第三は、中国人との交流である。北京大学内での限られた交友関係ではあったが、横山にとって

中国人は敵国人ではなく、寛大で親切な人たちであった。

一方、七三一部隊では、捕虜の人格を無視するために「マルタ」と呼び、通し番号で区別して匿名化していた。

デーヴ・グロスマン (Dave Grossman) は、戦闘員どうし、あるいは殺戮者と犠牲者との心理的距離が増大すると、攻撃性が増大すると言う。その心理的距離こそが、相手に対する共感を消し、人間である相手から心理的に離脱することが、破壊的攻撃の決定的な要因であるとする。この現象が起きるには、複数のメカニズムが関わっているが、それは、以下の四点に分類される。

①文化的距離＝人種の・民族的違いなどで、犠牲者の人間性を否定するのに有効。②倫理的距離＝みずからの倫理的優越と復讐／制裁の制裁を固く信じる心理。③社会的距離＝社会的に階層化された環境において、特定の階級を人間以下とみなす慣習の生涯にわたる影響。④機械的距離＝手の汚れない〈テレビゲーム〉殺人の非現実感のこと。機械的な緩衝物が介在することによって、犠牲者が人間だということを忘れることができる³²⁾。

このグロスマンの説を援用すれば、中国大陸に送りこまれた日本軍将兵の多くが、①と②の心理的距離を多かれ少なかれ持っていたと考えられる。中国人は劣等民族であるとの意識（＝文化的距離）と、正義の皇軍は無謬であり、「暴戾な支那人を膺懲する」のだ、あるいは戦友を殺されたのだから復讐をして当然だ、という意識（＝倫理的距離）である。当時、このような心理から自由であることが、いかに難しいことか想像に難くない。特に捕虜に対して、日本軍は、国際法を無視した処遇をし、どうせ殺される存在であるとしていた。したがって、抵抗できない状況にある捕虜に対して、軍医は、どうせ殺されるのなら、生体実験や生体解剖に使用して役立てるという心理も働いていた。

一方、中国人の教え子と良好な親交をもち、中国語を学ぼうとした横山は、中国人に対する心理的距離が小さかったのではないかと考えられる。

おわりに

横山の生体実験拒否から何を学ぶか、これが後世の我々の課題であろう。当然のことながら、人命を尊重し、非人道的な実験を行わないために生命倫理観の涵養が必要で、生命倫理教育も重要視されなければならない。

さらに、人種・民族差別をしない人権感覚を身につけることの大切さも指摘できよう。人権感覚は生命倫理観の中に重要な位置を占めると考えられる。

そして、人種・民族・文化の相互交流によって差別と偏見を無くし、相互理解をすすめることが求められる。

しかし、この二点を個人が備えていれば、医学研究者は、非人道的な実験から自由になることができるかといえば、そう断言はできない。なぜなら、戦争状況にあっては、個人の倫理性のみでは限界があるからである。

横山は自分が生体実験をせずに済んだことを幸運だったと思っていた³³⁾。彼は、自分の人生を振り返り、さらに反核を訴えて次のように述べている。

かつて私も戦争反対の気持ちはあっても、戦争体制に立ち向かって反対することもできず、召集令状を拒否することもできなかった。軍隊内では人体実験は拒否したが、所詮は奴隷であった。日本を、世界を広島・長崎の惨禍に落とそうとする政治が行われるならば、敢然として権力者に立ち向かい闘うつもりである³⁴⁾。

戦争中、権力に対して批判することができなかった反省をふまえ、晩年は反核運動に邁進し、医師としての良心を貫こうとした。彼は、新聞に「SDI 研究に参加するな」という文章を投稿し、SDI (Strategic Defense Initiative, アメリカの戦略防衛構想) のための研究に日本が参加することに反対した。その文章には人生の体験に裏付けられた考えが明快に示されている。

人類の歴史の中で初めて原爆の被害を受けた日本の政府はいかなる思想あるいは経済上の利害得失から (SDI に一末永) 参加しようとしているのか。日本の政治家に深い省察を期待する。私は日

本政府だけでなく、米、ソ連その他の諸国の政治家にも訴えたい。「人を殺すことをやめましょう。自分の国が一番正しく立派であると考えををやめましょう。この緑の地球を死の世界にするのをやめましょう。核兵器を廃絶して下さい。核をやめればSDIなど要らぬ」と³⁵⁾。

当時反核運動に対する批判には、共産党の指針に則ったソ連擁護の運動であるという種のものであった。しかし、その批判は、党派を超えて連帯を呼びかけた横山には的外れなものであった。

ここでの横山の論点は二つある。

第一に彼は、決して人を殺してはならないという位置に立っていた。絶対的な生命の尊重である。この主張を彼は、「ヒポクラテスの誓い」を敷衍しつつ展開した。彼によれば、誓いは「命を尊重せよ。いかなる圧力があっても人を殺すな。人を殺すことに智識を貸すな」と解釈されるのである。

近現代における戦争は、「戦争に協力する科学者がいなければ戦争はおこらない」といわれるように、戦力＝軍事科学力の側面が色濃い。彼は、SDI研究に携わる科学者に、自分の過去を重ね、「人を殺すことに智識を貸すな」と呼びかけたと考えられる。

この立場は、いかなる状況下でも殺人を認めないもので、「戦争という状況下に人が殺されるのは仕方がない」という立場とは、まったく相容れないものである。

第二点目は、自己の大義の正当化を各国がやめるように主張していることである。自己の正当化は、敵を有罪であると決めつけ、罰か復讐を以て臨むという態度をとらせるのである。そして、相手を殺すことは正義の執行であるという合理化を可能にしてしまう。

では、「自分の国が一番正しく立派であると考えること」ではなく、何を意図したらいいのか。横山は書いていないが例えばそれは、他国と対等関係に立つということにつながる。国家間の力の強弱に関わらず、他国に対して対等な他者として敬意を払うことを述べたかったのではなかったか。

以上の二点は、絶対的な生命の尊重と他国との対等関係の保持ということに要約できる。

横山は、日中戦争の体験をふまえ、戦後の冷戦を憂慮し、この根本的な主張を日本社会に投げかけようとしたのであった。

この主張は、冷戦期を過ぎてなお新しく、未だ人類が解決しえない課題として、そして大多数の人々の悲願として存在し続けている。

注・参考文献

- 1) 中央档案馆・中国第二歴史档案馆・吉林省社会科学院編『細菌戦と毒気戦』中華書局、上海、1989年(平成1)の第一部では、「日軍細菌部隊及其罪行」として、日本軍の細菌戦に関与した戦犯の証言を、第三部では、「滅絶人性的活体解剖」として生体解剖を実施した戦犯の証言を収録している。第一部の日本語訳は、『細菌作戦』として、1992年(平成4)に、第三部は『生体解剖』として1991年(平成3)に、ともに同文館、東京から出版された。また、鱒澤彰夫解題『極秘 駐蒙軍冬季衛生研究成績』現代書館、東京、1995(平成7年)は、中国人捕虜を酷寒の環境下で敢えて凍傷にし、最終的に解剖を行った軍医の報告書である。蒔昭三「十五年戦争中の軍陣での『生体解剖』の実態」『北陸医史』17号1巻、2006年は、これまでの生体解剖の証言・記録を検討し、十五年戦争当時、軍陣で広範囲に生体解剖が実施されていることを明らかにしている。

以上のような、軍陣における広汎な生体実験・生体解剖の実施に比して、そのことを証言する者は、極端に少ない。証言を規制する様々な心理的・社会的要因が考えられる。

その中で手を下した軍医の中には、内心自己の残虐行為を後悔し、苦しみぬいた人がいたのではないかと考える。筆者の眼を引いた資料に、次のような、軍医の遺族(弟)が綴った文章がある。「兄は、医者として、一人息子が被爆後、毎日衰弱してゆくのみをみて、助からぬ事が分かり、非常に悲しんだ。息子が死んだあと(21年9月2日)9ヶ月後に、自らの命を絶った。原因は、軍医として、ビルマ戦線で、軍の命令で生体解剖させられた事だと言う事を、五年前に知った。然し私には、原爆による、一人息子の死も原因の一端であるとも思えてならない」(『日本被団協『原爆被害調査』第二次報告』『日本原爆論大系第2巻』689頁、日本図書センター、東京、1999年(平成11))この軍医は、戦争における加害と被害の苦しみを一身に背負い、そして、背負いきれずに命を絶つに至ったと考えられる。

- 2) 吉開那津子『消せない記憶－湯浅軍医生体解剖の

- 記録』日中出版、東京、1981年（昭和56）は、中国山西省踏安陸軍病院において自ら生体解剖を行った湯浅謙の証言もとに構成されている。同書で湯浅は、軍医になって中国大陸に渡れば、生体解剖を行う機会があることを、医学生の間から既に知っていた、と述べている（65頁）。また、全国の医学部・医科大学から多数の若手研究者が、海外の防疫給水部に送り込まれているが、その目的について送り出す側は、おおよそ理解していたと考えられる。
- 3) 小千谷市史編集委員会『小千谷市史本編下巻』430~431頁、新潟県小千谷市、小千谷、1967年
 - 4) 横山正松「若い日の私」『毎日新聞』1986年9月11日
 - 5) 佐藤千代「いいじ正松」、横山哲夫編『いいじ正松』30~31頁、私家版、1994年（平成6）
 - 6) 前掲注2)
 - 7) 新潟大学医学部創立75周年記念事業期成会編『新潟大学医学部創立七十五年史上巻』607~610頁、同期成会、新潟、1994年（平成6）
 - 8) 新潟大学医学部創立75周年記念事業期成会『新潟大学医学部創立七十五年史上巻』27頁、同期成会、新潟、1994年（平成6）
 - 9) 新潟大学医学部50周年記念会編『新潟大学医学部五十年史』504~505頁、同記念会、新潟、1962年（昭和37）
 - 10) 新潟大学医学部50周年記念会編『新潟大学医学部五十年史』503~504頁、同記念会、新潟、1962年（昭和37）
 - 11) 「特高月報」昭和15年8月分、明石博隆・松浦総3編『昭和特高弾圧史1』太平出版社、東京、267頁、1975年（昭和50）
 - 12) 北村四郎『激動の中に生きて』167~204頁、考古堂書店、新潟、1988年（昭和63）
 - 13) 楠原俊代『日中戦争期における中国知識人研究—もうひとつの長征—国立西南聯合大学への道』研文出版、東京、1997年（平成9）
 - 14) 横山正松「若い日の私」『毎日新聞』1986年9月11日
 - 15) 北京市政協文史資料研究委員会編、大沼正博・小島晋治訳、岩波書店、東京、1991年（平成1）
 - 16) 辻繁「腸管電気生理学の創始者横山正松先生の思い出」『ミクロスコピア』10巻2号、26頁、1993年（平成5）
 - 17) 横山ムツ「正松との五十年」、横山哲夫編『いいじ正松』4頁、私家版、1994年（平成6）
 - 18) 横山正松「若い日の私」『毎日新聞』1986年9月11日
 - 19) 1944年4月1日~9月30日の報告、防衛研究所図書館所蔵。この資料は、西野留美子「北京甲一八五五部隊の検証」『季刊 戦争責任研究』9号、46~53頁、1995年（平成8）で紹介されている。
 - 20) 西野留美子「北京甲一八五五部隊の検証」『季刊 戦争責任研究』9号、49頁、1995年（平成8）
 - 21) 中央档案馆・中国第二歴史档案馆・吉林省社会科学院編「日本軍北京駐屯細菌部隊にかんする衛生部陸世娘の状況調査」、『証言細菌作戦』24~26頁、同文館、1991年（平成3）および、同編「天壇防疫処の中央人民政府衛生部あて報告書」、『証言細菌作戦』27頁、同文館、1991年（平成3）
 - 22) 西野留美子「北京甲一八五五部隊の検証」『季刊 戦争責任研究』9号、51頁、1995年（平成8）
 - 23) 高嶋伸欣「マレー・シンガポールの細菌戦部隊—北京の細菌戦部隊を含む日本軍秘密部隊の実態—」『季刊戦争責任研究』2号、49頁、1993年（平成5）
 - 24) 中国における同部隊についての研究論文のすべて、北支那防疫給水部は、細菌部隊であったと規定している。例えば、謝忠厚「華北甲一八五五細菌部隊の研究」『抗日戦争研究』2002年第1期、2002年、徐勇「侵華日軍駐北平及華北各地細菌部隊研究概論」『抗日戦争研究』2002年第1期、2002年、謝忠厚・謝麗麗「華北（甲）一八五五部隊の細菌戦犯罪」『抗日戦争研究』2003年第4期、2003年など。
 - 25) 横山ムツ「正松との五十年」、横山哲夫編『いいじ正松』5頁、私家版、1994年（平成6）
 - 26) 横山正松「誰にもわかり筋道が通っていること」『ミクロスコピア』10巻2号、27頁、1993年（平成5）
 - 27) 辻繁「腸管電気生理学の創始者横山正松先生の思い出」『ミクロスコピア』10巻2号、26頁、1993年（平成5）
 - 28) 「核戦争を防止する福島県医師の会規約」『核戦争を防止する福島県医師の会ニュース』第2号、1頁、1984年（昭和59）
 - 29) 「講演会 ベンの行方」『Timesいわきインターネットニュース』1997年10月9日号 <http://www.iwaki.co.jp/Times/index1009.html>
 - 30) 辻繁「腸管電気生理学の創始者横山正松先生の思い出」『ミクロスコピア』10巻2号、26頁、1993年（平成5）
 - 31) 吉村寿人『喜寿回顧』317頁、吉村寿人喜寿記念行事会、京都、1984年（昭和59）
 - 32) 『戦争における【人殺し】の心理学』262頁~289頁、ちくま学芸文庫、東京、2004年（平成16）
 - 33) 戦後、横山は妻に「俺は殺さないでよかった」と言っていたという。（横山ムツ「正松との五十年」、横山哲夫編『いいじ正松』5頁、私家版、1994年（平成6））
 - 34) 横山正松「暑い日に思うこと」『仁伍会誌』31号、6頁、1986年
 - 35) 横山正松「SDI研究に参加するな—核廃絶は被爆国の願い—」『毎日新聞』1986年、8月21日、朝刊

Shomatsu Yokoyama, a Physiologist Who Refused to Conduct Experiments on Living Human Bodies

Keiko SUENAGA

Fukushima Medical University, Department of Human Science

This article introduces the life of Shomatsu Yokoyama (1913–1992), a physiologist and military doctor, to the reader. During the Sino-Japanese war, Yokoyama disobeyed orders given by his superior officer to conduct inhumane medical experiments on humans.

Not only in Unit 731, but also in other units, many military doctors were involved in medical crimes against residents of the areas invaded by the Japanese Army. Inhumane living-body experiments and vivisections were widely conducted at that time.

There were, however, a small number of researchers who did not follow the orders to perform human-body experiments. Highlighting the life of such a rare researcher for the purpose of ascertaining the reason for his noncompliance with the order will provide us with insights on medical ethics.

When Yokoyama was a student, his teacher, Professor Rinya Kawamura, informed him that he had been requested by the army to conduct special experiments. The remuneration for conducting such experiments was over 10 times more than the research fund allocated to the professor. Kawamura declined the request on the grounds that accepting it was against humanity. Kawamura warned Yokoyama that he might face the same situation in the future and asked Yokoyama to mark his words.

Yokoyama was called to Ko-1855 Unit in 1944 and ordered to carry out living-body experiments by his superior officer. He disregarded the order, remembering Kawamura's words. As a result, he was dispatched to the dangerous frontlines.

This article explores why Yokoyama was able to disobey the order to conduct inhumane experiments while shedding light on his personal background and his relationship with Rinya Kawamura. This article chronicles the life of one medical researcher who followed the dictates of his conscience during and after the war.

Key words: Japan-China War, Shomatsu Yokoyama, Human experimentation, war crimes, Rinya Kawamura